
LIFE GAME

レボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I F F E G A M E

【Nコード】

N 4 2 8 0 C

【作者名】

レボ

【あらすじ】

ある部分意外普通の高校生修吾の父親との人生をかけたゲームが始まる。

始まりの日

はあっ

はあっ

自分の息遣いが聞こえる……

ドクンっ

ドクンっ

心臓が脈うつてるのがわかる。

「僕は何を必死に逃げてるんだ……。」修吾は人気のない路地裏でつぶやいた……。

事の始まりは昨日。

彼は普通の高校に通う普通の高校生の男の子。

だが彼の父親はそんな彼にいらだっていた。

彼は成績は悪くない。かといって良くもないが、授業が体育の時間に生き生きするどこにでもいる普通の男子。ルックスも悪くはない多少はモテるが意中の女の子にはフラれるタイプ

実際いままで3人の女の子と付き合っが、本当に好きな子と付き合いえた事はないし告白すら出来ずにいる。

だが問題はそんなことじゃない。

彼の父が気に入らないのは、彼が学校に行っている事自体なのだから……。

何故なら彼の父親の職業は極道、通称ヤクザなのだから……。

修吾はそんな父を知っていながらも、自分の味方である母を説得して、学校に通っていた。

だがこの日事件は起こった……。

始まりの夜

その日、修吾はちよつと遅めに帰った。

空は暗く、時間は9時頃だろうか……

修吾の家は伝統あるヤクザの家らしく、大きな純和風の家だ。

知らない人なら寺か何かと間違えるかもしれない……

修吾が門をくぐると母屋との間に誰かって立っている……足下にも何かあるようだ。

「おや……じ?」

修吾は尋ねながら近寄って行く、やっと顔が見えそうな辺りで人影が答えた。

「今日は遅かったな……」

やはり親父だ! !だが足下のものはまだ確認出来ない。

そして近付けない、近付くなという雰囲気を出している……

修吾が耐え切れず、

「わつわるかったよ、でもまだ9時だ、そんな怒られる程の時間じゃない! !」

逆ギレしてみた、通用するだろうか?

親父の重そうな口が開く。

「別に怒つちやいない、ここで待ってたのはお前にはなしがあるからだ……」

空気が重い、なんなんだこのプレッシャーは! ?

「これお前のだろ?」

親父が何か投げた。

闇に不気味に何かが光った。

地面に落ちた光を拾って見る。

「えっオレの……ハサミ」

よく覚えている、いつもオレの机に置いてあるハサミだ……た

だ。

「なんでオレのハサミ親父が持つてんだよ!!しかもなんかぬるしてるぞ……」黙っていた親父が口を開く

「そうだろうな……」

親父が遠回りな言い方をするときには、何か重い事実が隠れてる。

頭をフルに働かせて考えないと……

そして一つの結論にたどり着く。

「てめえ!!これで足下の動物刺したろ!!、何考えてやがる」

修吾が普段けして見せない強い怒りを見せる。

だが親父は動じない。

「60点だな」

「なにっ!」

修吾の怒りはます一方だがまるで動じない。

「まず刺したのはオレじゃないお前だ。」

「はあ!？」

親父の発言に思わず修吾は叫んだ。

「意味がわかんねえよ!？」

「なら黙って聞いてろ、いいかお前のハサミで指紋はお前のしかなく、目撃者多数、しかも被害者も犯人はお前だと言っ。どこに疑う余地がある」

黙って聞いていた修吾が叫ぶ。

「ハサミはともかくやってねえのに目撃者がいるわけねえだろ!!」

第一被害者って……」

修吾は気付いた。

「……被害者？」

そつだあの足下の物は人なのだ!!。

「人を殺したのか!？」

「殺しちゃいない大事な組員だ。第一死んだら話せんだろ、そして

ここはオレの組だ全員お前がやったと叫ぶ。」

「てめっ……」

修吾の言葉を遮り親父が言う。

「一度しか言わないから良く聞け、これから30分後に警察を呼ぶ、もちろん犯人はお前だ。捕まりたくなければ逃げる、一週間逃げ切ったら別の奴を自首させて助けてやる。」

「てめっ……」

また親父が遮っている

「カウントスタート!!」

親父は腕時計を眺めてカウントをはじめた

「くっ」親父はやると言ったらやることは逃げるしかない。

逃げる修吾の背中に親父が叫ぶ

「必死に逃げる!! お前の人生をかけたゲームだ!!」

こうしてオレの最悪の一週間がはじまった……

絶望の日

「うっ！」

まばゆい光が修吾の目を覚ます。

「もう明るいな……」

昨日家を出てから修吾は、しばらく逃げ回ったが幸いまだ事件の二ユースは流ず、安心した修吾は路地裏でゴミといっしょに寝ていた……

もちろん彼にそんな経験はないが、あの家で見て来た、警察の恐さが彼のプライドを捨てさせた……。

「今何時だろう？」

携帯を開き時間を確認使用とする。

……画面が真っ黒だ。

「昨日充電出来なかったからなあ、電池がキレたか、仕方ない誰か来る前に行こう、誰かに見つかって警察を呼ばれたら終わりだ。」
終わり……その言葉が頭に重く残る。

「そう……終わりなんだ、絶対捕まる訳にはいかない、捕まったらまともな職にはつけなくなってしまう。」

彼は親がヤクザな事に特に文句はない。

だが自分が継ぐとなると別問題だ、彼は家を継ぐ気はなかった。

そしてそれは家族も知っている。

……ふと頭に浮かんだ事が事件をつなぐ。

「それが狙いなのか？」もちろん捕まって、犯人にされればもうまともな職にはつけないだろう。

あるのは、安月給でこき使われるような仕事か……家を継ぐかこう考えるとすべて説明がついてしまう。

この事件は、親父が後継者を作るためはじめた鬼ごっこなのだ。

彼の人生すべてを左右するゲームLife GAMEはもう始まっている。

「とりあえず早くここをでないと……」そう言って、修吾は路地裏を歩き出した。

彼は生まれも育ちもこの町だ。この辺りの事は知り尽くしているし、友達も多い。

まずは、一番近くに住んでいる友達を頼ることにしたのだ。

見ず知らずの町ならまだしも、自分がこの町で捕まる訳がない……と修吾は思っていた。この時はまだ。

「何とかつけたよ……」

修吾は普通の民家の前にたどり着いた。

そこは、今現在の彼女百合が住む家だ。

正直修吾は百合が好きでもなんでもなかった。ただのカワイイ女子程度にしか思っていないかつたし、事実修吾が好きなのは別にいた。

だがある日彼女に呼び出され告白された修吾は、付き合う事をすんなり了解した。

修吾は本命と両思いになることはないと確信していたから、正直力ワイければ誰でもよかったのだ。

それでも彼が最初にここを訪れたのは、もちろん近かったこともあるだろう。

だがそれ以上に自分を好きとってくれた。彼女なら自分を助けてくれると信じていたのだろう。

「ピンポン」

チャイムが嫌に陽気な音を奏でる。

今は大体火曜の昼間、共働きの百合の家は普段この時間は家にいないが、二階の百合の部屋の窓に人影が見え百合がいると確信した。

多分自分の事件で休校にでもなったのだろう。

「……どちらさまですか？」

百合がインターホンに出る、修吾は顔がうつらないようにしていた。

「僕だ……修吾。」

「修くん！？ちよつちよつと待つてて！」
慌てた様子でインターホンを切る。

確認はしていないが、多分もうニュースになっているのだろう。

「ガチャッ」

ドアが開く音がした。

「おっおはよう」

制服姿の百合が出て来た。右手に何か持っているようだが、彼女の体に隠され見えない。

「おはよう学校はどうしたの？」

修吾の問いに百合が言いにくそうに答えた。

「その、今朝のニュースで、その、休校になって……」
といいながら、百合が家の前の道路で出て来て向かい合う。

……震えてる？

「百合どうしたの？」

百合は目に涙すら浮かぶ。

「修君……ゴメンナサイ!!」

百合の隠れていた右手が真っ直ぐ僕に向かって来る。

修吾は慌てて後ろ飛ぶ。

かるうじて、当たる事は避けられたようだ。

今なら百合の右手が良く見える。

「百合なんだよそれ……なんのつもりだよ!!」

百合が右手に隠し持っていたのは、女性でも当てるだけで男性を倒す事が出来る武器、スタンガンだった。

「私の家ね、いつも夜中になるとお父さんとお母さんがケンカするの。昔はこんな事なかった、お父さんが競馬にハマって借金いっぱい作っちゃてからかな」

百合は涙を浮かべ体は、震えている。

修吾も足がガクガクし始めたが気にせず話し続ける。

「さっき家に修君のお父さんがきて言われたの。」

百合はまえにうちに連れて来た事がある。

そのとき親父を紹介した覚えがある。

もちろん職業はふせたが……

「うちの息子をつかまえてくれれば君のお父さんの借金は肩代わりしよう。って」

修吾がたまらず叫んだ。

「だからって!!」

「それだけじゃないの、修君のこともうニュースでもやってる!人を刺して逃げたって!修君は罪を償わなきゃダメなんだよ!!」

百合が思いつきり泣き出した。

たまらず修吾が言った。

「僕はやってない、信じてくれよ!!」

すぐに百合が言い返す。

「信じられないよ!修君いつも本音いつてくれないじゃない!!修君が何考えてるか、あたしわからないよ!!」

この言葉に修吾はショックを受けた。

百合を愛さない自分が百合に愛してもらおうなど都合が良すぎたのだ。

こんな状況になって初めて修吾は自分の過ちに気付いたのだ。

思わず修吾はその場を逃げ出した。

泣き崩れた百合を置いて。

そして修吾はきづいてしまった。

自分を愛してくれていたはずの、百合に信じてもらえなかった自分にどれだけの味方がいるというのか。

修吾は後五日間以上も、孤独に逃げなければ行けないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280c/>

LIFE GAME

2010年10月15日21時00分発行